

# 村上春樹の壁と卵

—— 〈オウム以後〉 を考えるために

野 中 潤

## 一、〈オウム以後〉という問題

『風の歌を聴け』（一九七九年六月『群像』）以来の村上春樹の歩みは、『ねじまき鳥クロニクル』を分岐点として大きく二つの時期に分けて考えられることが多い<sup>(1)</sup>。その際にキーワードとしてしばしば取り沙汰されるのは、村上春樹自身の使った「デタツチメント」と「コミットメント」<sup>(2)</sup>という概念である。そしてこの二つの概念を持ち出す上で焦点となってくるのは、一九九五年に起きた二つの出来事、すなわち一月十七日の阪神淡路大震災と三月十九日の地下鉄サリン事件である。たとえば阪神淡路大震災については村上春樹は、自分が生まれ育った神戸の街が壊滅的な打撃を受けたということもあつてかエッセイなどで何度も言及しているし、『神の子どもたちはみな踊る』（二〇〇〇年二月、新潮社）のように震災を主要なモチーフの一つとする短編集も出している。地下

鉄サリン事件の被害者たちにインタビューをして上梓された『アンダーグラウンド』（一九九七年三月、講談社）の巻末にある「目じりのない悪夢」の中でも、「阪神大震災と地下鉄サリン事件は、日本の戦後史を画する、きわめて重い意味を持つ二つの悲劇であつた」と記し、「私たちの精神史を語る上で無視することのできないう大きな里程碑として残ることだろう」と述べている。ただし、『1 Q84』<sup>(3)</sup>までの村上春樹の軌跡を冷静にたどって見たとき、そこに浮かび上がってくるのは「震災前」と「震災後」ということよりもむしろ、「オウム以前」と「オウム以後」という問題の重要性である。したがって、不可避な天災である震災とテロという人災（≡犯罪）という二つの出来事を「圧倒的な暴力」という要素によって無理を承知で一つにくくろうとしているのは、もしかすると村上春樹にとつての「震災」が阪神淡路大震災という現実的な出来事であるということ以上に、地下鉄サリン事件として露顕した地殻変動をメタフォリカルな出来事として指し示すための言葉だったから

なのかもしれない。

「地下鉄サリン事件」が「震災」をメタファーとして招き寄せているのだとすれば、それははいったいどのような要請に基づくものなのだろうか。また、「地下鉄サリン事件」はどのような文脈において村上春樹の変化の契機になったのだろうか。これまでの論者<sup>(4)</sup>がしばしば参照してきたのは、『アンダーグラウンド』のあとがき「目じるしのない悪夢」である。

— その中で村上春樹は、地下鉄サリン事件の第一報を知ったときの違和感について語り、〈被害者＝無垢なるもの＝正義〉という「こちら側」を立てた上で〈加害者＝汚されたもの＝悪〉という「あちら側」の行為と論理の歪みを断罪していくところ、にマスメディアの基本姿勢があつたと指摘している。マスメディアが作り出した構図の中で地下鉄サリン事件を体験した人々は、多かれ少なかれ「正義」「正気」「健全」という「大きな乗合馬車」(大きなコンセンサス)に乗り込むこととなった。しかしオウム真理教という「ものごと」は、「理解しがたい奇形なもの」として考えられるべきではなく、「自分というシステム」あるいは「自分を含むシステム」のうちに含まれているかもしれないものとして検証されていくべきだと村上春樹は指摘している。そして村上春樹は、一九九〇年の衆議院選挙に麻原彰晃が立候補したときのことを想起する。街宣車が流す不思議な音楽に合わせて象の面や麻原の面をかぶった男女が「わけのわからない踊り」を踊り、都内で選挙キャンペーンをしている姿を目撃したときのことである。そのようなオウム真理教の信

者たちの姿を、「もつとも見たくないもののひとつ」と感じ、「名状しがたい嫌悪感」と「理解を超えた不気味さ」を覚えたという。そして「自分とは関係ないもの」として、さつさと記憶の外に追いやってしまう。そのときの自分の心の動きを内省して得られたのは、「ああ、やつてるな」という感じで軽く受け流すことができず、感情をかき乱され、生理的な嫌悪のようなものを感じて思わず目をそらせてしまったということだった。それは、オウム真理教という「ものごと」が、村上春樹にとって「まったくの他人事ではなかったから」(傍点原文・以下同じ)なのだという。

いや、何も「私やあなただつて、ちよつと事情が違つたら、オウム真理教に入つて地下鉄にサリンを撒いたかもしれないませんよ」と言っているわけではない。そんな状況は現実的に(と)いうことは、確率的に)ほとんどあり得ないことだからだ。私が言いたいのは、「私たちがわざわざ意識して排除しなくてはならないものが、ひよつとしてそこに含まれていたのではないか」ということだ。

— このような言い方は、あるいは無用な誤解を招くかもしれない。しかし今述べた仮説を延長していった場合に到達するきわめて広いグラウンドの真ん中に立つて、私は実はこう思っている。「こちら側」＝一般市民の論理とシステムと、「あちら側」＝オウム真理教の論理とシステムとは、一種の合わせ鏡的な像を共有していたのではないかと。

正義と悪、正気と狂気、健全と奇形の明白な対立を作り上げ、悪と狂気と奇形の世界である「あちら側」にオウムを位置づけることによつて、世間の圧倒的多数の人間は、正義と正気と健全の世界である「こちら側」に囲い込んで事件をやり過ごした。その後に残ったのは、「ちよつと不思議な『居心地の悪さ、後味の悪さ』」だったと村上春樹は書いている。そしてそれを忘れるために、あの事件そのものを「裁判」という固定されたシステムの途中で処理してしまおうとしているというのだ。「こちら側」と「あちら側」の弁証法とも呼ぶべき地下鉄サリン事件をめぐるこれらの考察は、「ポスト・アンダーグラウンド」として『文藝春秋』に連載された『約束された場所』(一九九八年十一月、文藝春秋)と受けつがれ、『海辺のカフカ』(二〇〇二年九月、新潮社)や『1Q84』のような長編小説を書き継いでいく近年の村上春樹の仕事の中にも影を落としている。それがどのような形で影を落としているのかを述べるのは簡単なことではないが、コミットメントの時代の村上春樹の創作活動にそのようにして持続してきた問題が露呈した事例の一つとして、エルサレム賞授賞式でのスピーチをあげることができる。

## 二、壁と卵をめぐる

二〇〇九年二月、「壁と卵」というメタファーを使った、村上春樹のエルサレム賞の受賞スピーチがメディアにぎわせた。イスラエルの人びとを前にこなれた英語でスピーチをする様子は、素顔を

見せることがほとんどなかった村上春樹の肉声を伝える貴重な映像としてテレビニュースで報じられ、授賞式直後からインターネット上に英文が公開された。さらに、ほとんど時間差をつけずに日本語訳も公開された。スピーチの全文は、『文藝春秋』の四月号に独占インタビュー付きで正式に掲載されたのだが、そのときはもはや遅きに失した感すらあった。

授賞式のスピーチの核心部分であると言えるのが、「非常に個人的なメッセージ (a message, one very personal message)」と前置きした上で使われている「もしここに硬い大きな壁があり、そこにぶつかって割れる卵があったとしたら、私は常に卵の側に立ちます。」ということばなのだが、村上春樹は自分自身のことを解説して、「爆撃機や戦車やロケット弾や白燐弾<sup>(5)</sup>」が「高い壁」であり、「これらによつて押しつぶされ、焼かれ、銃撃を受ける非武装の市民たち」が「卵」と述べている。短絡的に考えると、「壁」イスラエル／卵「ガザの人びと」と言っているようにも見え。しかしどうやら事態はそれほど単純ではない。

たしかに、「爆撃機」(bombers)も「戦車」(tanks)も「ロケット弾」(rockets)も「白燐弾」(white phosphorus)も「高い壁」というメタファーが意味するものであると明言された上で列挙されている。ガザ地区のパレスチナ人たちを殺戮する圧倒的な暴力に対する抗議の声としてスピーチを捉えるなら、これらはすべてイスラエルの圧倒的な軍事力の象徴と考えることができる。ところが「白燐弾」が非人道的なイスラエル軍のガザ地区攻撃を象徴する兵器であるす

るならば、「ロケット弾」はじつはイスラエルを攻撃するためにガザ地区にいるハマスが使っている攻撃手段を象徴する兵器でもあるのだ。四つ列挙されているものうち後の二つは、「ロケット弾(パレスチナの暴力)／白リン弾(イスラエルの暴力)」という対立する二つの暴力を意味していることになる。だとすれば、「爆撃機(Bombers)」という単語にも、別の含意があると考えなくてはならないのかもしれない。つまり最初に挙げられているのは、「戦車(tanks)」とともにイスラエルの圧倒的な軍事力を象徴する兵器としての「爆撃機(Bombers)」が例示されていると考えるのではなく、携帯型のロケット弾とともにパレスチナ人サイドの暴力を意味する「爆弾を抱えて自爆テロを行う人(bombers)」であると考えなければならぬことになる。つまり、列挙された四つの「高い壁」は、「爆弾(ハマス)／戦車(イスラエル軍)」というペアと「ロケット弾(ハマス)／白リン弾(イスラエル軍)」というペアを作り、対立する二つの陣営それぞれの側の兵器を組み合わせている列挙しているということになるわけだ。これらの単語がそのようにして配置されているのだとすれば、イスラエルにもパレスチナにも加担しない立ち位置を周到にしつらえながらスピーチを展開していることになる。

したがって、イスラエルにあるエルサレム賞授賞式の会場でスピーチをしている村上春樹が、「壁と卵」というメタファーが持つ意味について、「戦車」や「ロケット弾」を列挙し、「それがこのメタファーのひとつの意味です」と確認した後、次のように述べていることには十分な注意が払われなければならない。

しかしそれだけではありません。そこにはより深い意味もあります。こう考えてみて下さい。我々はみんな多かれ少なかれ、それぞれにひとつの卵なのだ。かけがえのないひとつの魂と、それをくるむ脆い殻を持った卵なのだ。私もそうだし、あなた方もそうです。そして我々はみんな多かれ少なかれ、それぞれにとつての硬い大きな壁に直面しているのです。その壁は名前を持つています。それは「システム」と呼ばれています。そのシステムは本来は我々を護るべきはずのものです。しかしあるときにそれが独り立ちして我々を殺し、我々に人を殺させるのです。冷たく、効率よく、そしてシステムティックに。

授賞式の会場にいるイスラエルの人びとを含む聴衆に対して、「我々」という人称を用い、「私もそうだし、あなた方もそうです」と呼びかけているのは、「壁」イスラエル／卵「ガザの人びと」という単純な図式でメッセージを受け止めるべきではないことを示唆している。「かけがえのないひとつの魂と、それをくるむ脆い殻を持った卵」の側に立つことを表明するときに、「間違っていたとしても」「正しいか正しくないかは、ほかの誰かが決定すること」という留保を加えていることをふまえれば、ガザ地区の人びともイスラエルの人びとも、等しく「卵」なのだ。告発されているのは、イスラエル人もパレスチナ人もなく、あるいはイスラエル兵士でもテロリストでもなく、「システム」とあるというわけである。

このようにして提示されている「壁と卵」の話の後に、唐突とも言える形で村上春樹が語り始めるのは、滅多に語ることはない父親の話である。

私の父は昨年の夏に九十歳で亡くなりました。彼は引退した教師であり、パートタイムの仏教の僧侶でもありました。大学院在学中に徴兵され、中国大陸の戦闘に参加しました。私が子供の頃、彼は毎朝、朝食をとる前に、仏壇に向かつて長く深い祈りを捧げておりました。一度父に訊いたことがあります。何のために祈っているのかと。「戦地で死んでいった人々のためだ」と彼は答えました。味方と敵の区別なく、そこで命を落とした人々のために祈っているのだと。父が祈っている姿を後ろから見ていると、そこには常に死の影が漂っているように、私には感じられませんでした。

父は亡くなり、その記憶も——それがどんな記憶であったのか私にはわからないままに——消えてしまいました。しかしそこにあった死の気配は、まだ私の記憶の中に残っています。それは私が父から引き継いだ数少ない、しかし大事なもののひとつです。

中国から復員した村上春樹の父親は、おそらく『ピルマの豎琴』の水島上等兵と同じように、生き残りの罪障感を抱えながら死者たちの冥福を祈り続ける日々を過ごしたのだろう。それを見

つめる息子は、そこにどのような記憶が横たわっているのかを具体的に知ることができないまま、濃厚な死の気配を引き継いでいる。このような親子関係は、おそらく決して例外的なものではない。たとえば、「エルサレム賞」受賞スピーチについて、ブログ「内田樹の研究室」のエントリー「壁と卵(つづき)」の中に次のような一節がある。

村上春樹はいっさい中華料理を食べない。食べることができない。／中国にかかわるある種のオブセッションかもしれない、と村上春樹はどこかで書いていた。／「飲み込むことができない」というのは、きわだつて象徴的なふるまいである。／中国についてのある経験(それは彼自身の経験でさえない)が名付けられ、理解され、類別され、忘却されることを拒んでいる。／その「名付けられ、理解され、類別され、忘却されることを拒むもの」が「父」の『』であったと、それが無言のまま遺贈された、と。そう「息子」は感じている。／その「遺贈された空洞」が村上文学の「核」のひとつを形成していると私は思っている。／どうして、そんなことが言えるのかといえば、私もまた「父」から「戦争についての沈黙」を遺贈された「息子」のひとりだからである。(6)

村上春樹は、「壁と卵」というメタファーの先に、大陸での侵略戦争に加担した陸軍兵士としての父親を配置している。つまり村上春樹の父親は(おそらく内田樹の父親も)、壊れやすい殻の中に

入った個性的でかけがえのない心を持ったひとつの「卵」であるということだ。そうだとすれば、村上春樹は、暴力装置の一翼になつたという父親の過去を免罪しようとしていることになる。つまり、イスラエルの人びとに対する「我々はみんな多かれ少なかれ、それぞれにひとつの卵なのだ」という発言は、どちらにも加担しない中立的なスタンスを意図したものである一方で、結果的には空爆を実行しているイスラエル人も免罪しかねない論理をはらんでいるということになる。中立的でどちらにも加担しない発言をすることは、告発すべき「悪」を見失ってしまうことに帰結してしまいかねないのである。そのような陥穽に落ち込むことを回避するためのぎりぎりのエクスキューズとして、スピーチの終わり近くで村上春樹は次のように述べている。

私がここで皆さんに伝えたいことはひとつです。国籍や宗教を超えて、我々はみんな一人一人の間です。システムという強い壁を前にした、ひとつひとつの卵です。我々にはとても勝ち目はないように見えます。壁はあまりにも高く硬く、そして冷ややかです。(中略)考えてみてください。我々の一人一人には手に取ることできる、生きた魂があります。システムにはそれがありません。システムに我々を利用させてはなりません。システムを独り立ちさせてはなりません。システムが我々を作ったのではなく、我々がシステムを作ったのです。

「脆い殻を持った卵」である「我々」は、好むと好まざるとに関わらず、「壁」を立ち上げてしまう。「我々」が生み出した「システム」こそが、実体としては存在していないけれどもいつの間にか「卵」としての「我々」を圧殺し始める「高く硬い壁」なのである。そして「壁」は、「我々」が作ったものであるにもかかわらず、「我々」が自由に制御できず、ときに「我々」を踏みじり、圧殺しようとしてくる。そういう意味で、民族、国家、宗教、お金、インターネット、核爆弾などはすべて「壁」である。村上春樹は、エルサレム賞授賞式の会場にいたイスラエルのシモン・ペレス大統領でさえも「我々」という人稱の中に囲い込み、システムという強固な壁を前にしたひとつの「卵」と見なしていることになる。

### 三、沈黙をしないという選択

「壁」という比喻は、村上春樹が書いたいくつかの小説を想起させる。たとえば「街と、その不確かな壁」(一九八〇年九月『文学界』)として発表された短編小説をもとに「純文学特別書き下ろし作品」として刊行された『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』(一九八六年、新潮社)を、その代表的なものとしてあげることができる。もちろんこれは「オウム以前」のものである。しかし父親から濃厚な死の気配を引き受け、全共闘世代の中で独自の立ち位置を保持し続けてきた村上春樹の「オウム以前」の創作活動の中に、「オウム以後」につながるものを見出すことができるの

は当然のことだろう。

同様に「オウム以前」に書かれた「沈黙」という短編小説を例に、「壁と卵」という比喻につながる基本的な発想が、どのような形で描き込まれているのかを確認しておこう。

「沈黙」は、短編集『レキシントンの幽霊』に収められ、のちに「集団読書テキスト」として全国学校図書館協議会から単独の小冊子の形で販売されている、文庫本で三五ページほどの短編小説<sup>(7)</sup>である。物語の大半は、大沢という人物が「僕」に過去の出来事を語る形で展開している。高校三年の夏、クラスメートが自殺し、その原因が恐喝まがいのいじめによるものだという噂が広がって教師を含めた周囲の人間のすべてが大沢を無視し始めるというのが物語られた過去の出来事の骨格である。高校生だった大沢の周囲に張り巡らされた「沈黙」というのは、級友の青木の悪意が生み出したものだった。周囲のすべての人間が自分を無視し、抗議することすらできないという苛酷な状況が続くが、大沢は辛うじてそのような生活に耐えて毎日を過ごしていく。大沢を徹底的に孤立させる担任や級友たちの「沈黙」は、エルサレム賞のスピーチで語られた比喻を使えばまさに「壁」である。この高くて硬い「壁」の前において大沢は、「かけがえのないひとつの魂と、それをくるむ脆い殻を持った卵」であるということになる。ところがある日、通学電車の中で偶然に出会った青木の目を見ているうちに、大沢は深い悲しみと憐れみに襲われる。青木は決して「壁」そのものではなく、「壁」を作り出し、自分自身も「壁」によって他者から隔てられ、傷ついて壊れ

てしまった脆弱な卵だということに気づくのである。大沢はそのことを深く理解することによって、クラスメートのすべてから無視され続けるという日々を耐え抜き、卒業までの日々を過ごす。

ここで注目しておきたいのは、大沢を孤立させ、青木をも傷つけるものがどのようにして作られるのかということについて語った次のような大沢のことばである。

でも僕が本当に怖いと思うのは、青木のような人間の言いぶりを無批判に受け入れて、そのまま信じてしまう連中です。自分では何も生み出さず、何も理解していませんに、口当たりの良い、受け入れやすい他人の意見に踊らされて集団で行動する連中です。彼らは自分が何か間違ったことをしているんじゃないかなんて、これっぽちも、ちらつとでも考えたりはしないんです。自分が誰かを無意味に、決定的に傷つけているかもしれないなんていうことに思い当たりもしないような連中なんです。彼らはそういう自分たちの行動がどんな結果をもたらそうと、何の責任も取りやしないんです。本当に怖いのはそういう連中です。

ここで批判されている人間が、じつはエルサレム賞授賞式のスピーチに出てくる「我々」ではないだろうか。脆い殻を持った「卵」である「我々」は、同時に高くて硬い「壁」を作り出す主体でもあるのだ。逆に言えば、「他人の意見に踊らされて集団で行動する連中」も、

「多かれ少なかれ、それぞれにひとつの卵」であり、「それぞれにひとつの硬い大きな壁」に直面しているということなのである。また、スピーチがメディアを通して日本にも届けられたということとを踏まえて考えると、遠い場所からガザ地区の惨状を傍観している一人一人の日本人も、かけがえのないひとつの魂を持った「卵」であると同時に、「沈黙」という形で「壁」を生み出している「我々」なのかもしれない。だからこそ村上春樹は、「我々」がいついかなるときに「そういう連中」になるかわからない存在であるということをも痛烈に自覚しつつ、それでも何とかそういう場所から自分の身を引き離そうと、遠く離れた場所での「沈黙」ではなく、エルサレムでのスピーチを選択したのである。

#### 四、日和見主義をこえて

『文藝春秋』四月号の「村上春樹独占インタビュー&受賞スピーチ」僕はなぜエルサレムに行ったのか」の中に、「正論原理主義」と「日和見主義」という話が出てくる。「純粹な理屈を強い言葉で言い立て、大上段に論理を振りかざす」ことが「正論原理主義」であり、一九六〇年代の学生運動において「自分の言葉で誠実に語るうとする人々」を「日和見主義」として糾弾し、排除していったのだと言う。その結果、理想を掲げて生まれたベトナム反戦運動や学生運動は、どんどんやせ細って教条的になり、最終的には連合赤軍事件のような悲劇を生み出した。ほとんどの学生たちは運動に

挫折したとたんに理想を捨てて企業戦士となり、バブルを生み出して崩壊させ、失われた十年とその後の混乱をもたらすことになる。こんな風になつた僕らの世代」の歩みを概括した村上春樹は、日本の戦後史に対して「集合的な責任」を負っている自分たちには、「もう一度それぞれのかたちで理想主義みたいなものを取り戻す道を模索」する責務があるのではないかと述べている。

受賞スピーチをした村上春樹は、「純粹な理屈を強い言葉で言い立て、大上段に論理を振りかざす」ような「正論原理主義」とは違う立ち位置からメッセージを発しているように見える。そういう意味では「日和見主義」的である。あるいはそれは、「自分の言葉で誠実に語ろうとする」ことを通して、「もう一度それぞれのかたちで理想主義みたいなものを取り戻す道を模索」しようとする試みであったのかも知れない。しかしその一方で、「正論原理主義」とは別の難題を招き寄せているようにも見える。

村上春樹はイスラエルのシモン・ペレス大統領やエルサレムのニール・バカラット市長を含めた七百人ほどの聴衆の前に、「我々はみんな多かれ少なかれ、それぞれにひとつの卵なのだ」と語った。空爆を受けて命を落としたガザ地区の老人や子どもが「卵」であるというのは、日本のメディアを通じて状況を把握している人間にとっては飲み込みやすい比喩である。しかし村上春樹のスピーチが、強大な軍事力をそなえたイスラエルの人々、とりわけペレス大統領のような権力者を「壁」ではなく「卵」の側にいるものと見なす戦略の上に語られているということは、それが日本語の字幕がついた日本



のテレビ受像機を通して受け止められているという条件のもとでは、語られた英語のスピーチが置かれたコンテキストとコンタクトのままに了解することが困難である。

しかしイスラエルという国が、「基本的にホロコーストの生き残りによって作られた国」であり、「個人と同じレベルでトラウマを背負って」いて、「過剰防衛はいけないと頭ではわかっている、少しでも攻撃されれば身体が勝手に強く反撃してしまう」という「心理システム」に囚われていると指摘する村上春樹が、「独占インタビュー」として発表された文章の中で地下鉄サリン事件の実行犯たちについて次のように述べていることを考えれば、「卵」という比喩の振幅は、その最大限の幅の中で受け止められなくてはならないはずである。

実行犯たちはもちろん加害者であるわけだけど、それにもかかわらず、僕は心の底で彼らもまた卵であり、原理主義の犠牲者だろうと感じます。僕が激しい怒りを感じるのには、個人よりはあくまでシステムに対してです。

彼らは自我をそっくりグルに譲り渡し、壁の中に囲い込まれ、現実社会から隔離されて暮らしていました。そしてある日、サリンの入った袋を与えられ、地下鉄の中で突き刺さるこいと命じられたときには、もう既に壁の外に抜け出せなくなっていたのです。そして気づいたときには人を殺して捕らえられ、法廷で死刑を宣告され、独房の壁に囲まれて、いつ処刑されるかわから

ない身になっている。そう考えると寒気がします。BC級戦犯と同じです。自分だけはその目には遭わないよと断言できる人がどれだけいるでしょう。システムと壁という言葉を使うとき、僕の頭にはその独房のイメージもよぎるのです。

ところが、このような形で「卵と壁」という比喩を受け止めるのであれば、独房に収容されたグルやA級戦犯も「多かれ少なかれ、それぞれにひとつの卵なのだ」ということになりかねない。エルサレム授賞式の会場にいたイスラエルのシモン・ペレス大統領やエルサレムのニール・バカラット市長はもちろんのこと、ナチス・ドイツの警察官僚アドルフ・アイヒマンやアウシュヴィッツ収容所の医師ヨーゼフ・メンゲレでさえも、「多かれ少なかれ、それぞれにひとつの卵なのだ」ということになりかねないのである。

村上春樹がエルサレムという場所で、そのような意味合いにおいて「我々」という人称を使ったのだとすれば、告発されるべき「壁」はいつたどこにあるのだろうか。

## 五、結語

「僕はなぜエルサレムに行ったのか」という独占インタビューの記述によれば、二〇〇八年の憂国忌にエルサレム賞の内定通知を受け、迷った末に授賞式への出席を決めた頃の村上春樹は、出版を控えた『1Q84』の校正刷を大量に抱え込んだ状態だったという。した

がつて「壁と卵」のスピーチには、地下鉄サリン事件を主要なモチーフの一つとしていると考えられる『1Q84』が微妙に影を落としているに違いない。『1Q84』の青豆雅美は、BOOK1と2において、ドメスティック・バイオレンスの加害者を次々に殺害し、新興宗教の教祖を暗殺した。にもかかわらず、BOOK3において天吾の子どもとも教祖の子どもとも定かではない子どもを孕み、月が二つある世界で自殺することもなく生き延び、恋愛物語の王道を歩むかのように天吾との再会を果たしている。ヒロインの青豆は、どちらかと言えば「壁」というよりも「卵」として読者の感情移入の対象になつてしまうのだろうか、行使した暴力のありようを冷静に見つめれば、そこには地下鉄サリン事件の実行犯と同じようなロジックが横たわっている。だとすれば、天吾と再会した青豆が遭遇する悲劇を描かない限り、(オウム以後)の村上春樹のコミットメントを『アンダーグラウンド』の先に進めることはできないはずである。

『1Q84』を書き継いでいる村上春樹の前には、いったいどのような「壁と卵」が見えているのだろうか。

#### 註

(1) 『ねじまき鳥クロニクル』は、一九九四年四月に第一部「泥俵かささぎ編」(初出、一九九二年十月〜九三年八月『新潮』と第二部「予言する鳥編」(書き下ろし)を刊行。プリンストン大学の客員研究員としてアメリカに滞在している最中に執筆された。その後、阪神淡路大震災と地下鉄サリン事件が起きた一九

九五年六月に帰国し、八月に第3部「鳥刺し男編」(書き下ろし)が刊行された。こうした執筆の経緯やノモンハン事件のような歴史的な出来事を描いていることなどから、村上春樹の大きな転換を示す小説と目されている。たとえば二〇一〇年三月発行の『昭和文学研究』第六〇集には、山根由美恵と松枝誠による村上春樹の「研究動向」が掲載されていて、それぞれ「震災以前の村上春樹」、「震災以後の村上春樹」と題されている。

(2) 一九九五年の夏にアメリカから帰国した後、十一月に京都で行われた対談をまとめた『村上春樹、河合隼雄に会いにいく』(一九九六年十二月、岩波書店)の中で村上春樹は、「以前はデタッチメント(関わりのなさ)というのがよくにとつては大事なことであったが、「コミットメント(関わり)」ということについて最近よく考える」ようになったと発言して、「六八〜六九年の学生紛争」の時代と、「オウム事件と阪神の大地震」が起きた現在を結びつけないながら「物語」や「癒し」の問題を語っている。

(3) 二〇〇九年五月に「BOOK1」と「BOOK2」の「全2冊」として刊行。本稿校正中の二〇一〇年四月に「BOOK3」が刊行された。いずれも新潮社より書き下ろし。

(4) たとえば清水良典は、『村上春樹はくせになる』(二〇〇六年十二月、朝日新聞社)において、村上春樹の軌跡を一九九五年をターニング・ポイントとして二分割した上で、『アンダーグラウンド』から『海辺のカフカ』までを論じる第1部を「目じるしのない悪夢」の引用から始めている。

(5) 二〇〇九年四月の『文藝春秋』の日本語訳は「爆撃機や戦車やロケット弾や白燐弾や機関銃」となっている。ところが、併載されている英文には、「機関銃」に相当する単語は見当たらない。おそらくスピーチにはなかったはずの「機関銃」という単語が、公開された日本語訳に限って付け加えられていることになる。単純なミスであるという可能性は低いと思われるので、何らかの事情により意図的に変更されているのだろう。

(6) 二〇一〇年四月現在、ブログ「内田樹の研究室」内で読むことが出来る。 [http://blog.tatsumi.com/2009/02/20\\_1543.php](http://blog.tatsumi.com/2009/02/20_1543.php)

(7) 小冊子『沈黙』（一九九三年三月、全国学校図書館協議会）。初出は『村上春樹全作品 1979～1989 ⑤ 短篇集Ⅱ』（一九九一年一月、講談社）。

(のなか・じゅん)

各年度ごとにその年の『現代文学史研究』掲載論文執筆者の中から、最も清新且つ優秀な業績をあげた若手研究者（満三十五歳以下）を選考し、左記の通り「現代文学史研究新人賞」を呈します。二〇一〇年度の第三回「現代文学史研究新人賞」の選考対象は、第十四集と第十五集です。若手研究者の意欲的な投稿を期待します。

正賞 賞状

副賞 五万円

〔選考委員〕

大久保典夫（所長）

郡 継夫（代表幹事）

諸田和治（副所長）

● 大久保所長の談話：学問研究をめぐる状況が激変し、文学研究で身を立てるのがますます困難になりつつある。そのような時代にあつて、少しでも若手研究者の励みになればと創設したものだ。副賞は、奨学金のようなものと考えてもらいたい。